

計算機，思い出すまま

川 嶋 辰 彦*

コンピューターと呼ばれる便利な機械の存在を僕が知ったのは、遅蒔きながら 1960 年代半ばであった。当時、X 大学大学院経済学研究科に在籍していた僕は、同じ構内にあった工学系の研究科に、コンピューター・プログラムの講義が新設されたことを或る日耳にした。殊更強い動機があった訳ではないが、科目名の斬新さに誘われるまま、その授業を聴講することにした。教室では、かなり初期のコンピューター言語が紹介され、フォートランでは

「 $C = A + B$ 」

と記せば事足りる寄せ算を、

* 学習院大学経済学部教授，計算機センター運営委員

「BをAに加え、然る後にその和をCとせよ。」

と言った具合に、予め指定されている語彙（英語）の中から適当な単語を選んで、計算式の内容を文章に綴り上げる必要があった。大学院の授業であったが、先生は矢継早に問題を出され、学生を名指しては答えさせておられた。時には、やや難解な同一問題を数名の学生に同時に黒板で解答させ、算術的作文能力を競わせながら、彼らに主要な問題点を教え込んでおられた。この講義を最後まで出席し果せたかどうか確かではない。しかし、ちょうどテレックス送信に使用するリボンに似た紙テープ上に、友人の助けを借りて穿孔しては、曲がりなりにもプログラムやデータを計算機に入力していたことを覚えているから、特別な具体的理由をもたないまま聴講していたにしては、予想以上に授業を楽しんでいたのかも知れない。

綴り方コンピューター言語の芸術的な丸みを溶かし去り、その簡潔な骨格だけを浮き彫りにすると得られるようなフォートランを用いて、計算や製表と取り組んでいたのは、それから数年後のことであり、僕が論文作成のためにY大学のコンピューター・センターへ足繁く通っていた時である。同大学で世界最初の本格的な真空管コンピューター（愛称エニアック）が1950年代に開発されたこともあってか、センター利用者の便宜に対しては、他大学に比較して遜色のない配慮が払われていた。例えば、徹底したカフェテリア方式が導入されているセンター内のユーザーズ・エアリアには、20台を超えるパンチ・マシンが備え付けられており、その4分の1は、穿孔カード10枚以下の急行ユーザー用として確保されていた。同様なプライオリティー・システムは、仕事（通常ジョブと呼ぶ）の仕訳基準にも見られ、必要計算時間、プリント用紙枚数、磁気テープ使用の有無、等の条件に照らして、ジョブ毎に優先順位がつけられる仕組みになっていた。したがって、計算時間（厳密にはCPU・タイム）10秒以内、プリント枚数10枚以下、かつ磁気テープ使用の必要なし、の範疇に属するジョブであれば、自分でカード・リーダーをかけた後、早い場合には数分後に、長くとも通常は半時間以内の待ち時間で、計算結果を手にすることができた。日曜を除いて毎晩24時迄ユーザーズ・エアリアの利用が許されており、自宅で夕食をとった後センターに再び戻ってもう一仕事こなそうとする常連達にとって、センター内の夜の談話室は専門領域の枠を越えた快い語り合いを可能にするサロンでもあった。そこには、明け方2時に閉館する大学付属図書館のロビーの雰囲気と共通する、若やいだ学問的薫りがあった。

サロンの談話室と言えば、数年前にZ研究機関に於いて、都市分析のプロジェクトに関与した。この研究所は米ソ間のデタントの果実として、1970年代初頭にウィーン郊外に設立されたものであり、現在、わが国を含む東西両陣営先進17ヶ国が加盟している国際研究機関である。研究所の建物は、マリア・テレジア女帝が16人にのぼる彼女自身の子供達を育てる格好な場所として、自ら選定したラクセンブルグ城である。この城は、オーストリア政府より年間1シリング（約16円）の低家賃でZ研究機関に貸与されているものであるが、家賃はZ研究機関の設立当

時以来滞納されたままである。研究所に付設されているコンピューター・ルームは城の一郭を占め、四六時中ユーザーに開放されている。コンピューターの容量は必ずしも十分に大きいとは言えないが、プログラムやデータの作成、入出力命令などは、全て数多く装備されている端末装置のディスプレイを通して手軽に操作できる。パンチ・マシンやカード・リーダーは殆んど使用する必要がない。もし、豊富な計算容量や特別な研究データが入用なときには、近くのウィーン大学や国際原子力機関はもとより、国外のピサ、ブダペスト、プラハなどのコンピューター・センターと特別回線で直接リンクできる仕組みが整備されている。ところで、コンピューター・ルームの入口に隣接する階段をのぼると、城中で最も見晴しの利く広間に至る。ベルヴェデーレと名付けられたこの部屋は、かつては、マリー・アントワネットをはじめとするマリア・テレジア女帝の王子・王女達が遊んだ、育児室であった。今は、サロン風の談話室に装が一新され、互に経済体制を異にする国々より集っている学者達が親しく円居う場である。彼等はここで、共同研究について談論し、休暇旅行の計画を打ち合わせ、人生を語り合う。ベルヴェデーレで彼らの寛いだ姿に接するとき、波及的効果を地道に積み重ねるさまざまな努力が続けられるならば、国際平和もさばかり脆弱ではあるまいとの希望に励まされる。

X, Y, Zの3ヶ所で、コンピューター・ユーザーの立場から僕が享受した経験は、その周縁部での個人的経験と重なり合って、味わい深い懐かしさを伴って思い出される。学習院大学計算機センターの場合、ディスプレイの数は少なく、サブルーティン・ライブラリーもいまだ控え目である。テープ・リーダーに至っては800BPIの時代物である。とは言え、プロッターの利用が可能になったし、ユーザー用の100メガバイト・ディスクも入った。計算環境は非常に緩慢ではあるが、着実に整いつつある。何れ不日、わが大学の計算機センターについて思い出を語る時、幸にしてX, Y, Zに対すると同様な懐旧の念に酔えるような気がするの、僕の錯覚であろうか。大学と計算機センターの愈々の充実を期待したい。